

広西博物館の室外展示の特色と発展

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2018-03-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 呉, 偉峰 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00008865

広西博物館の室外展示の特色と発展

呉偉峰

訳：長沼さやか

広西民族文物苑は、広西チワン（壮）族自治区博物館の室内陳列展示の延長と拡張であり、広西博物館の室外展示部分である。24000㎡の敷地面積内に、広西のチワン族、ヤオ（瑶）族、ミャオ（苗）族、マオナン（毛南）族の極めて特色豊かな民家や、トン（侗）族の風雨橋、鼓楼、さらに寨門、舞台、民族の手づくり工房、銅鼓の彫刻群像、銅馬、銅鎮塑像などを展示している。周囲には石林や池、珍しい花や樹木を植え、民家の内部には生産工具や生活用具、民族工芸品を原状のまま陳列し、手づくり工房では陶器づくりや紙づくり、油しぼりの現場を示している。毎年、年中行事のたびに、舞台上でチワン族が民族歌舞を演じ、竹林の奥では「山歌」の掛け合いが行われ、ミャオ族の家・苗楼では民族の特色ある軽食を味わえる。広西民族文物苑に足を踏み入れると、チワン族、ヤオ族、ミャオ族の民家や建造物を遊覧することができるし、民族の歴史文化は生き生きとしていて味わいがある。

1988年、広西チワン族自治区の30周年記念日に公開されて以来、広西民族文物苑はその斬新な構想、色濃い民族風情と独創的な展示内容で、観光客が中国内外から区都に旅行に来た際には、かならず訪れる場所となった。19年にわたる公開の過程において、広西民族文物苑は観客に直接目にする形で広西の各民族の関連状況を紹介してきた。観客のお墨付きを得て、新たな民族文化の設計と解釈をおこない、共通した性質をもつ観光地の今後の建設に対して影響力を及ぼしてきた。それは、広西博物館の陳列展示の最大の特徴となっている。しかし、広西文博事業の繁栄と発展と広西民族博物館の建設にともない、広西博物館の室外展示部分にも新たな変化と発展が生じている。

1

広西民族文物苑の設立の構想は1980年に始まった。これに先立ち1978年に広西チワン族自治区博物館の新館が建設された。当時、文化庁文物処の責任者と博物館関係者らは、広西博物館の民族文物の陳列の問題に焦点をあて、空いた敷地を利用して「広西民族村」、または「広西博物館民族文物露天陳列場」と称すべきものをつくろうと考えた。周知のように、広西は民族地域であり、各民族は長い歴史のなかで多くの民族文化遺産を残してきた。たとえば、有名な銅鼓や岩画のほかにも、民族建築、民族の生産工具、生活用具、民族工芸品、民族食品、豊富で多彩な民族風情などがある。少数民族の独特の気品

と伝統文化が傑出しているのである。「村」(民族村)と「館」(博物館)を結合させるという着想は、観客に、広西全体を観光せずとも、短時間内で広西の精髓が集まった民族文物や歴史文物、民族風情を余すところなく見学し、民族食品を味わい、民族工芸品を購入することを可能にした。

広西民族文物苑の展示内容は主に、広西の民族建築、民族民間技芸、民族食品、民族歌舞の上演などである。広西の民族建築は民族文物苑の主要テーマで、なかでも品格があり特色や技巧のあるチワン族、ヤオ族、ミャオ族、トン族、マオナン族の5つの民族建築がある。チワン族の建築様式は、異なった地理環境、土地の状況、資材の特性を利用しているため、高床式住居(「干欄吊楼」)が主となっている。苑内のチワン族の高床式住居は、広西龍勝各族自治县瓢里郷交州村の廖姓住宅のもので、1950年代初期に建てられたものである。このような家屋は素朴で実用的、美しく上品、快適でゆったりしている点が特色で、見る者に明るく広々とした印象を与え、南方の高温多湿な気候に適している。チワン族の高床式住居は3階建てで、1階は家畜を飼育し、小間物や農具などをおいている。2階は居住空間で、寝室やイロリ、仕事場やバルコニーがある。3階は屋根裏部屋となっており、穀物や普段使わない生活用具を収納している。内部の調度品はすべてチワン族の生活習慣に応じて配置されている。生活に端を発し、生活にもとづき、生活に忠実な陳列・配置をすることで、観光客は住居の本来の姿を見ることができ、高床式住居のまわりには柵田や養魚用の池、碾礮(水碓)があり、農家らしい情景となっている。

舞台は広西のチワン、ヤオ、ミャオ、トン族などの民族の山村によくみられる公共建築物で、民間の歌舞、芝居を上演する場所である。年中行事や祝いごとの際にはいつも、各村で自ら組織した劇団が村々を回り、行事に彩りを添える。民族文物苑内でも舞台を展示している。これは、チワン族の建築の特色をもつ連体式の舞台であるが、実際には1つの低い高床となっており、建築芸術の展示であるだけでなく、文芸演目を演じる格好の場となっている。

ミャオ族住宅は、懸造り式の「吊脚楼」に民族の特色がある。苑内の苗楼は、融水ミャオ族自治县安泰郷ミャオ族民家の様式にもとづき、現地のミャオ族の工匠が手ずから建築したものである。2層に分かれている。下の層は囲いがなく、2階は居住空間となっている。柱にはそれぞれ上部に花や果物の彫刻を施し、扉や窓にも美しい模様を装飾し、軒の柱の上には牛の角を掛けている。開放的な広間はイロリの部屋の前部につくられ、池の上に跨っている。これらはすべての苗楼の最も特色ある部分である。広間で休息をすれば、水に建物の姿が映り魚が泳ぐ様を楽しむことができる。吊脚楼の前の狭い平地には、色とりどりで美しく、頂上に金鶏が立ち、牛角の彫刻が施された蘆笙柱がある。これはミャオ族の縁起物である。ミャオ族は歌や舞いをよくするが、毎年、ミャオ族の正月「苗年」と「坡節」、「新禾節」には、闘馬、闘牛、蘆笙の競演会などの活動を

行っている。高くそびえる蘆笙杆は、蘆笙競演会で歌ったり踊ったりするときの中心となるだけでなく、ミャオ族の象徴と標識になっている。

ヤオ族の建築は多種多様で、竹楼、木楼、泥で壁をつくった瓦ぶきの家屋、レンガと木で組んだ瓦ぶきの家屋などがある。苑内では、金秀ヤオ族自治県十八家村の建築を参考に一棟の竹楼を模造し、ヤオ族建築を代表するものとしている。竹楼は木の組桁、竹の壁、竹の床板、竹の瓦を使っている。室内ではヤオ族の生産生活用具と風情ある写真を展示している。竹楼は小高くなっているところの頂に建てられ、高所から下を臨める。坂の下には高床式の円形建築物があるが、これはヤオ族の支系「白褲ヤオ」の高床式穀倉である。穀倉は四本の支柱で支えられた1枚の方形の板のうえに造られ、4本の柱の上部には4つのさかさまの陶器の甕が据え付けられ、ネズミが糧食を盗み食いするのを防いでいる。これは、広西合浦県漢墓から出土した穀倉模型の形状とたいへんよく似ている。

風雨橋はトン族の公共建築物の一大特色である。トン族の村では、ほとんどの場合、各村に風雨橋がある。風雨橋は「廊橋」、または「花橋」ともいうが、雨風を避けられることからこの名がついた。文物苑内の風雨橋は、トン族の風雨橋の素材に基づいて設計されたもので、すべてにスギ（広葉杉）材を使っており、交通や休息の場としての機能を一身に集めている。これは、民族文物苑の主たる建築物となっている。

トン族の鼓楼もやはり村の公共建築物で、トン族の人びとが集まり活動する中心となっている。トン族の村では、各姓が少なくとも1つの鼓楼を持っており、平時は村の大事を相談する場となるが、「月也」や「多耶」、琵琶歌などの民間行事活動もまたここでおこなわれる。苑内の鼓楼は三江トン族自治県馬胖鼓楼を参考に建てられ、9層の軒を重ね、入母屋造りの上部をもつものである。

民間の手づくり工房では、主に各種の大型生産工具を陳列している。辺境の山岳部から運んできた大型の搾油機は、100年以上の歴史がある。水力を動力とし、動く石輪が回転し茶の実を挽いて油をしぼる。このほか、古い石製の搾糖機や、民間技術を用いた製紙工具を展示しており、ここで観客は、現代社会では見ることが難しい古い生産方法を知ることができる。

民族の特色をそなえたレストランは、苑内では水際につくられたミャオ族の吊脚楼の上に設置されている。レストラン内では広西の独特の軽食、五色のオコワ、トン族の「油茶」、「涼粽」（チマキ）、「蕉葉糍」（芭蕉の葉で包んだモチ）などを味わうことができる。レストラン内には一口食べれば忘れることができないような特色ある民族料理が用意されている。香り高く柔らかいヤオ族の「竹板鶏」、酸味と辛さがおいしいトン族の「竹串肉」、色とりどりで鮮やかなミャオ族の「五彩銀絲拌」、まるで本物のようなチワン族の「蝴蝶過河」、「鴛鴦魚合」、キン（京）族の「一帆風順」、「緑荷苞」など特色ある料理がある。

また、多種多様な民族歌舞の上演は、観客にまるで多民族の大家族のなかにいるような気分にさせる。毎年、広西の民族の重大な行事「国際民歌節」は区都の南寧でおこなわれるが、このときに文物苑のあちこちに美しく耳に心地よい歌声が聞こえてくる。チワン族の「迎客歌」、「剪彩歌」、「酒歌」、「攔路歌」、「送客歌」や、漢族の「敬茶歌」、「賀郎歌」、トン族の「同樂歌」、「油茶歌」、ムーラオ（仡佬）族の「問候歌」、マオナン族の「送禮歌」、キン族の「祝福歌」など、歌声はみな情緒があり素晴らしく、広西の各民族の礼を重んじ情に厚い人生儀礼と、天賦の芸術的才能を表現しており、「歌の海」としての限らない魅力をも現している。

また、民族文物苑は、各民族の喜びとの大きな「家」でもある。区都で働く少数民族同胞は、毎年自分たちの民族の年中行事の日に民族文物苑に集まってくる。たとえば、トン族の「過冬」や、ミャオ族の「苗年」（新年）、ヤオ族の「盤王節」、ムーラオ族の「依飯節」、マオナン族の「分龍節」などである。少数民族は自発的に、独自の方法で自分たちの年中行事を祝っている。民族文物苑を家と見なし、文物苑に彩りを添えている。

民族文物苑は芸術と現実的な生活を一体としたもので、社会生活、自然環境、民族文化と美の追求が織り成す現実的な物質空間を形成しており、観客にその場に身をおかせることで、広西の民族文化に対する直感的な理解をもたらす、というのが民族文物苑の展示構想であった。現在見るところ、民族文物苑が得ている社会的、経済的な効果と利益は、文物苑の創立者が当初は考え付かなかった。以下に分けて記述する。

民族文物苑は、その独創的な展示スタイルで、これからの類似した民族観光地に対して啓示すべき点を有している。民族文物苑の構想は1982年に計画、建設に着手し、1988年に公開した。広西博物館の民族民俗に関する展覧の室外延長部分として、最も早くに着想しただけでなく、国内でもはじめての民族伝統建築、民族情緒あるパフォーマンス、自然景観をあわせた展示様式であった。その後、続々と建設、公開された深圳の中華民俗文化村、桂林の灕江民俗風情園、雲南民族村の関係者が、かつて広西民族文物苑を訪れ参観した。そのなかの中華民俗文化村は、民族文物苑の元責任者を招き、料理のスタイルを受け継ぎ、広西の少数民族の特色を有した民族レストランをつくった。これは、民族伝統文化を広く発展させ、民族伝統文化と現代建築を互いに結合させることへの模索を体現した新しい文化観念となり、文化事業の産業化が積極的な貢献を生み出すことにもつながった。

民族文物苑はまったく新しい民族文化を描出した。民族文物苑の展示内容は伝統的で、民間に由来する文物、生産・生活・文化に関わる用品の陳列と、斬新で特色ある民族歌舞の上演、飲食文化が完璧に結合している。広西はチワン族の自治区で、「三月三」は一部の地域でチワン族の歌節（歌祭り）となっている。チワン族の「三月三」歌節と結び付け、自治区は1993年からの6年間、毎年、「広西国際民歌節」を開催してきた。これと同時に、広西民俗儀礼歌の公演も文物苑において5回開催している。国際民歌節の前に

おこなわれていた「三月三」チワン族歌節は、民間の伝統的民族パフォーマンスが主で、歌手はみな民間の芸人であった。1993年に広西国際民歌節が始まるや、専門家が演出し、専門の演技者が上演する広西民俗儀礼歌の公演は、広西民族文物苑の看板プロジェクトとなった。銅鼓彫塑群もまた、広西国際民歌節のシンボルとなった。民族文物苑内の民俗儀礼歌の公演は、広西の各民族の民間における総合芸術に根源があり、歌唱、舞踏、服飾を集め一体化している。演出家たちは、行事に念入りに手を入れ作り上げることで、伝統芸術を発揚させ、さらなる鑑賞性と芸術性を備えたものとした。多くの観光客は、苑内で広西の各民族の人びとの情熱的でサービスに優れた儀礼や、歌い踊る姿を十分に見ることができ、これにより国内外からの観光客の広西に対する理解が深まった。民族文物苑のこのような独特の展示方法はまったく新しい民族文化を描出してきたといえるだろう。

2

広西チワン族自治区博物館は、省（自治区）級の総合的な地誌博物館で、南寧市民族広場の東側に造られている。メインの建築物「陳列大樓」は、チワン族の高床式建築の特徴をもつ直方体の大型建築で、展示と展示事務とが一体となっている。広西チワン族自治区博物館の前身は、1934年に南寧に創立された広西省立博物館である。当時すでに規模が大きく、固定の建物を持ち、文物の所蔵は2万件以上に達していただけでなく、大量の石刻拓本図片と、各種の新旧図書資料を有し、さまざまな展覧をおこなってきた。抗日戦争が勃発して以降、広西省立博物館は移転を繰り返し、非常に不安定な情勢にあり、足を踏み出すのも困難であった。文物の損失もひどく、館名も何度も改められた。中華人民共和国が成立してから、広西の文博事業はようやく回復した。長年の計画・準備を経て、1956年5月1日、広西省博物館のメインビルが竣工し、再建事業の完成が宣言された。1958年3月、広西チワン族自治区の成立にともなって、広西省博物館から現在の名に改められた。

1978年に新たな展示棟が建設されて以来、当館では相次いで『広西歴史文物の陳列』、『広西革命文物の陳列』、『広西民族民俗展覧』、『広西の歴史における太平天国革命に関する陳列』、『古代銅鼓の展示』、『ブルネイ・スルタンの龍輦の展示』などの展覧を開催してきた。このほか、つねに短期で特別展を開催している。民族文物苑は、民族民俗の展覧を室外に伸張したものとして、銅鼓の彫刻群像をつくり、チワン、ヤオ、ミャオ、トンなどの民族の民家と代表的な建築物をそなえ、生産、生活用品の原状展示と民族の特色ある軽食を用意し、行事や休日には伝統工芸と民族の民間文芸の公演を行っている。当館にておこなう展覧のほかには、何度か国内外の都市に赴き特別展を開催したり、国

内外の展覧を当館でおこなったりして、文化交流を促進している。

古代銅鼓の展示と広西民族民俗展覧は、広西博物館の現在の主要な展示である（訳注）。広西は古代銅鼓が分布する主要な地域の1つで、豊富な銅鼓が残存し種類もすべてそろっている。当館は世界でも銅鼓を最も多く収蔵する博物館であり、その数は360面に達する。そのなかの北流型銅鼓の1つは、鼓面の直径が165cm、重さが299kgあり、「銅鼓の王」と讃えられている。それゆえ、銅鼓は広西博物館の特色であり、その展示が人びとを魅了している。

広西民族民俗展覧は、室内の陳列展示と室外の民家展示、伝統工芸の公演が含まれている。室内の陳列展示は1987年に完成し、1998年に大幅な改装を行った。展示は数々の民族文物や写真で、広西に居住するチワン族、ヤオ族、ミャオ族、トン族、ムーラオ族、マオナン族、回族、キン族、イ（彝）族、スイ（水）族、コーラオ（仡佬）族などの11の少数民族の生活習俗を紹介している。チワン族は主に、壮錦、三月三歌節、人礼儀礼、製陶工芸などの内容を展示している。ヤオ族は、服飾、漁撈と狩猟、「石碑」、婚姻、「盤王節」と「達努節」などである。ミャオ族は歌や舞をよくし、とりわけ蘆笙舞を好むほか、女性はろうけつ染めや刺繍、錦織を得意とするため、これらの内容をすべて展示している。トン族は伝統建築の風格が独特であり、工芸に熟達している。錦織は雅やかで洗練されている。「搶花炮」や「闘牛」などの行事には風情があり、昔の「款制」も観覧することができる。ムーラオ族は服飾、いろり、煤研石（石炭採掘で出るくず石）の陶器、「依飯節」などの展示をしている。マオナン族は「毛南菜牛」、花編み竹帽、石刻、「儺劇」の面具などである。回族に関しては、聖職者アホンの衣装や、桂林の古く壮大なイスラム寺院、コーラン、洗礼の道具などの状況を紹介している。キン族は「唱哈節」、漁業用具、特徴的な女性の服装などに重点を置いている。水族の部分では、少女の服装、馬尾の刺繍付きの背負い帯、「豆漿画」、「水書」、「水暦」、および「端節」という宗教祭祀活動を展示している。イ族は、黒イ、紅イ、白イの服飾と祖先の輝かしい業績を記念する「跳弓節」の活動を写真や実物で重点的に展示している。コーラオ族は女性の服装や楽器「八音」、「拜樹節」などの内容である。

室内外が結合し、動静が互いに補いあっている点が、広西博物館の展覧の一大特色である。民族文物と文化の多くは現在進行形、すなわち少数民族がいままさに用いているものであり、関連する環境をも体感し得るものである点が、歴史文物との違いである。民族文化のなかには、大型で室内では展示しにくいものや、伝統の技術などもある。比較してみると従来の博物館の展覧は、展示品が静態的環境に置かれ、観客は展示から隔てられ、そこに入り込むことはできないという感覚があった。広西博物館の民族民俗展覧は、民族文化の特色を考えたらうで、一部の民族文化の建築、工具、手工芸、芸術などの実物を自然、開放的空間に配置することにした。つまり、民族文物苑の室外展示に

において、民族文化の内容を真実や自然に近い環境のなかに置き、展示の感化力を高めた。生き生きとして、味わいがあるというのが広西民族民俗展覧のもっとも大きな特徴なのである。

民族文物苑の当初の位置づけは、室内展示の外部延長部分であった。室外は比較的広い空間で民族文化を展示でき、内容も多方面にわたることが可能である。民族文物苑内には、民族レストランが設置され、博物館の職員は広西の少数民族の特色をそなえた民間料理にもとづいて整理、研究をおこない、風味ある民族食品を創作し世に送り出してきた。社会の各方面の評判もよく、区都・南寧市において市場向けの民族料理の先駆となった。深圳の中国民俗文化村は、建設後に当館の職員数名を招き、民族レストランの経営を請け負わせた。文物苑が行っている少数民族の歌舞上演や造紙、刺繍、造酒、錦織などの上演活動もまた、民族文化の展示にあふれる活力を与えている。これと同時に、民族文化の展示内容は従来の文物展覧とは異なり、ただ過去のものとしてではなく、民族文化の不断の発展と継続という特色を体現し、また民族文化を全面的に宣伝する仕組みともなっている。

人を基本とし、社会に奉仕するというのは、博物館が展示を通して行う有効的な社会還元の方法である。民族文物苑は建設後、広西の「三月三」民歌節、広西南寧国際民歌節の舞台の1つとなった。少数民族の演技者が、舞台や鼓楼坪（鼓楼の前の広場）、風雨橋の上、棚田の周囲で、豊かで多彩な民俗歌舞を上演するというのが、民歌節の1つのハイライトとなっている。広西には11の少数民族が存在するが、そのうちのいくつかの少数民族は、その民族の行事にさいして民族文物苑を家とし、祝賀活動を行っている。周辺の町の人々、役所の団体、学校などもよく文物苑で各種の活動を行っている。統計によれば、文物苑は公開から現在まで十数回にわたり、映画やテレビドラマの撮影に使われ、良質な社会利益を生み出している。また、博物館は民族民俗展覧の特徴を利用して、多くの宣伝教育活動を展開している。たとえば、民族文化「一日体験」活動などがある。主に学校の教師や生徒に、民族民俗展覧の参観、民族知識の追究、民族公演活動のなかでチワン族の「走板鞋」、「跳竹槓」、「多耶」などに参加し、最後に民族食品を味わうといった活動から、学生たちが生き生きとした感性の旅路で民族文化を学ぶという、素晴らしい効果を生み出している。

また、民族民俗展覧は運営の時間と展示内容を結びつけ、民族工芸品を開発するという項目を重視している。たとえば、チワン族の錦織の実演と展示を通して、製造業者が連合で新たな壮錦製品をデザイン・製造したものを博物館内で販売し、比較的良い効果と利益を上げている。民族観光工芸品の数や様式が増え、市場が拡大したことで、製造業者の側は生産量が増加し、伝統工芸もまた保護の機会を得ることとなった。博物館内ではさらに「広西伝統工芸展示館」を公開しており、広西伝統工芸のすばらしい品々を一所に集め、展示するだけでなく販売もしている。博物館の展示内容を豊かにするのみ

ならず、良い経済効果をもたらしている。

さらに重要なのは、文化産品の継承と発展が得られたことである。博物館は有形文化遺産を保護するだけでなく、無形文化遺産をも保護している。民族文物苑の展覧はさらに手工芸職人の保護の問題を考慮している。もともと、文物苑の木造建築を建造したのは広西三江トン族自治県のトン族の民間の工匠であった。彼らは熟達した伝統工芸技術を有し、博物館の支援のもとで区都・南寧にとどまり、木工、修理、工芸の実演などをおこなってきた。ここ数年では、彼らが従事するトン族建築の設計制作、トン族建築の模型工芸品の開発が成功をおさめ、「楊家匠風雨橋有限責任公司」という会社を設立した。その前後には、武漢、南京、南寧、玉林、桂林、三江などで、風雨橋、鼓楼、苗楼、壮楼など民族建築の新築事業を落札した。彼らが制作した「同心橋」は、1997年に自治区人民政府から香港に贈られた。設計・制作した風雨橋、鼓楼などの工芸品模型は、全国民族観光工芸品コンクールで一等賞を受賞し、現在では高級な贈答品となっており、民族伝統文化の高揚に非常に効果的である。広西博物館の民族民俗展覧はとくに、民族村の民族伝統建築、民族情緒あるパフォーマンス、自然景観の展示方式を国内でもはじめて合わせたもので、今後の民族文化展示にも良い啓示を与えている。

3

広西博物館は、広西の歴史の各時代の象徴的な文物を収蔵している。たとえば、歴史的、科学的価値のある生産工具や、日用品、祭祀用品、石碑、石刻、岩画、銅鼓、書画、写真、文献、書籍などが大量に残存している。広西民族博物館を建設した後、広西博物館が新設する予定とするのは、「瓠駱遺粹」、「天国朝暉」、「南疆烽火」の3つの主要展示である。西瓠・駱越とは、戦国時代から秦漢時代にかけて、現在の広西地域で活動していた二大百越支族である。西瓠・駱越は、生活する場所の自然環境と特定の生産方式によって、独特の物質文化と精神文化をはぐくんできた。中華人民共和国成立以来、瓠駱の故地に関する考古学的な発見が数多くなされ、数万点もの文物が出土した。「瓠駱遺粹」は、200件近くの瓠駱遺跡に関する秀逸な文物にしばり、貴重な文物を通して、広西の古代の労働者の勤労で勇敢、聡明で才智ある姿を展示し、瓠駱民族の政治、経済、文化生活を解明するための、もっとも直接的な実物資料を提供するものである。

また、広西は太平天国運動が起こった土地で、太平天国の指導者は広西で6年間の宣伝、組織活動をおこない、群衆に働きかけるといって苦しく複雑な闘争の後、桂平市金田村にて武装蜂起を起こし、軍を指揮して北上した。武装蜂起の戦火は18の省にまで及んだ。「天国朝暉」は、当時の広西の革命闘争の全貌を表しており、広西における太平天国運動の輝かしい業績を再現している。広西各民族人民の革命精神を褒めたたえ、特色ある中国社会主義の建設と、「小康」(中流)社会建設における広西各民族人民の開拓と向

上、勇気と前進を激励している。広西各民族人民は、愛国主義と革命闘争の精神に富んでおり、「烽火南疆」のテーマは、近現代の革命闘争史、反帝国主義、反封建主義闘争における広西各民族人民の不撓不屈、犠牲を恐れぬ勇敢な闘争精神と、英雄的な行政を広く知らしめるものである。展示の目的は、これら展示を我われ自治区の愛国主義、革命伝統教育の重要拠点とし、革命の歴史に対する青少年の理解を広め、革命闘争の知識を増やさせ、革命闘争の精神を学ばせ、新時代の活力を育成することである。あわせて、我われ自治区の豊かな革命観光資源と結合させ、我われ自治区における革命観光の一大スポットとする。今後の広西博物館の展示形式の設計思想は、過去の優秀な伝統を継承し、博物館と文物苑という室内外の結合、動と静の相補、生き生きとして味わいある、人を基本に社会に奉仕する、保護を主体とした科学技術がリードする思考の道筋を継続して考えて行かなければならない。広西の歴史の淵源と地方の特色を重視し、観衆に深く独特の印象を与えてゆくものである。

民族文物苑はここ30年来、広西博物館の室外展示として、博物館の民族民俗文物展覧・展示の伸展と拡張を担ってきた。教養性、娯楽性、趣味性を一体とした、広西地方独特の民族文物に関する屋外展示館であり、地方と民族の特色をそなえてきた。しかし、現在の状況は昔の比ではないほど変化している。

広西文化大省プロジェクトは文化産業の発展の途上にある。文化産業の発展は、広西文化大省建設の1つのキーポイントで、新たな経済成長点であり、率先して行ってゆく意義、全体的な意義を備えた重要な突破口である。いかに、より広く開放的な文化の伝播と交流をおこない、古い歴史と現代文明を融合させ、文物資源を開発し、博物館の文化産業を発展させるかという点は、我われが考えてゆかなければならない問題である。

「中国—東盟（アセアン）博覧会」は恒久的な開催地を南寧としている。それは南寧に巨大な人の流れ、物流、情報、資金の流れをもたらすと同時に、観光業の発展をももたらし、経済の飛躍を促した。南寧は大観光・汎北部湾経済発展構造のもと、地域性をおびた国際都市としての地位が突出している。ある都市において、博物館と人びとの文物・古文化資源の開発利用というのは、その地域の文化程度をはかる基準であり、時代が我われに与えた使命であるとともに、時代とともに進むということの体現でもある。文物苑は早急に品質を高め、従来の閉鎖的で単一的、静止した空間と仕組みを打破しなければならない。都市にさらに多くの文化の開放と交流を提供するため、新たな都市イメージに調和するような文化空間をつくらねばならない。

文物苑の設計は、一種のプロジェクトの改造というだけでなく、文化の着地点として

の開発と改造を通して、都市文化の構造を調整し、都市機能の構造を完全なものとし、都市の活力を増強し、都市文化の品位を高め、都市イメージを樹立し、都市の歴史と文化、および都市機能などを全面的に復興させるといった、一連の都市発展に関するマクロな戦略問題の総合的な研究企画でもある。

広西は文物資源が豊富で、広西の文物文化資源を具体的に示す文物苑の建設は、資源開発の戦略的な意義を持ち、都市の文化観光発展の推進力となる。また、文物苑を南寧の都市文化の有力な文化拠点とし、都市文化の伝播、発展の推進に影響を与え、古城路や民族大道など周辺地域の経済文化資源の開発利用を促進する。さらに直接的な影響力としては、今年、広西民族文化の精髓が集まる広西民族博物館が設立されようとしている。この博物館もまた、類似した室外展示を有している。我われが今後行ってゆかなければならないのは、創造性をもって広西文物苑の歴史的な使命を引き続き発揮しながら、広西の歴史文化を広西博物館の室内と室外の展示のなかに首尾一貫させ、歴史の深さをさらにそなえた文化の大舞台、広西の地方文化の色彩をよりいっそう帯び、現代と伝統が結合しあった新天地を造り上げることである。

改築後の民族文物苑の構想は、その「文物苑」の概念をとどめながら、引き続き「苑」を「文物の粋を集める」ことを理念とする。広西の各時代の建築や、きらめく文化の結節点を深く掘り下げ、再現する。たとえば、漢代陶屋を基礎とする漢文化建築、桂北地区の村落を特色とする民家建築、嶺南の情緒ある古い建築を主体とする騎楼建築である。広西博物館の歴史展示の伸展と拡張は、広西地方の建築芸術の展示のみならず、広西の貴重な文化遺産ともなりうる。以前の民族文物苑と比べてさらに創造性、開放性、文化性をそなえ、持続発展する文博産業、およびブランドとなる。

設計理念のうえで、文物苑は文物と観光を主題としており、産業が文物・文化の理念に溶け込んでいる。総合博物館の歴史文物展示は、文物苑と博物館展示において文物が互いに依存し、相互に補助し作用しあうことで、動と静を結合する新しい構造であり、歴史文物展示伸展の新しい理念となっている。新たな文化のブランド形成にもなりうるだろう。文物苑は広西ではじめて、地方の特色のある建築文化とその周辺環境を表した景観を伝承しており、このような感化力のある歴史文化の展示を通して、人びとに鮮やかな文化認知をうながし、そこから影響力ある都市文化ブランドを造りだす。文物苑は将来、地域性をもった文化特色を有することになるだろう。漢代の建築や人文、広西の村落建築文化の具体的な表現から海のシルクロードの騎楼文化に至るまで、突出した広西の地方文化の特色を核心とする。

また、開放性は、文物苑のきわだった特徴である。文物の経済価値は、都市文化の品位の向上や環境改善、投資の吸引、観光誘致が可能かどうかにある。文物苑は、新しい

時代の潮流に適合し、国際的な文化観光の消費習慣においてゆとりをもった文化的な場所になりうるだろう。文物苑の主要な内容に、「広西文物苑」の名称を残しているのは、文物苑の歴史的な使命を引き続き担い、博物館の歴史文化の伸展、補充、拡張とするためである。それは過去、そして未来においても博物館の歴史文化の室外展示場となりうる。文物苑は広西地域文化の特徴を融合し、広西の異なる時代の建築の特徴をくみとり、「漢儀尋幽」、「秀村竹影」、「古樓風清」を中心とし、広西の歴史発展の足跡を展示・表現する。広西の歴史文化の融合、開放、団結、発展の真髄を体現する。設計理念の創意工夫は、地方文化を主要な筋としている。

文物苑の苑は一般の意味における苑区とは異なる。それは、広西の地方文化、建築、彫塑などの真髄を集めたものであり、現代の流行要素と結合させた総合的な苑区である。博物館の文物、歴史、文化の動静の結合、古代文化と現代文化の融合を強調している。たとえば、地方の特色ある手づくり工房、村落、市街地などをつくり、博物館の収蔵品の開発と利用に注意を払っている。また、各種類型の文物展覧を開催し、各類型の銅鼓、銅鳳灯、銅面、陶製品などの古代工芸品を複製、または模造し、広西の特色豊かな旅行記念品を製造し、人びとの精神生活を豊かにしつつ、文物保護意識を高めている。根拠の異なる内容と機能を全体的に組み立てて、苑内の地理状況と周辺環境を調和させる。その機能のうち、「漢儀尋幽」とは、漢代の陶屋の建築スタイルを採用し、漢代の嶺南建築と人文、彫塑などの記号を抽出し、博物館と接続して都市における漢文化の滞在地点の伸展とすることである。「秀村竹影」とは、明清時代の広西漢族の典型である秀水村などの秀逸な村落を主体とし、村落文化と建築の特徴を傑出させることである。「古樓風清」とは、海のシルクロードがもたらした文化芸術交流を源とし、現在の汎北部湾に至る交流と繁栄を、古い騎樓街のような開放的な文化休息空間を通して解釈するなどであり、以上が三大主題区域である。博物館から「漢儀尋幽」、「秀村竹影」、「古樓風清」に至り、海のシルクロードから汎北部湾に至るまで、古代と近代文明を接続させる。

文物苑は1つの開放的な街であり、苑内には一本の湾曲した環状のメインストリートが通っている。亜熱帯の情緒ある植物のある景観、水辺のあずまやの建物が重なり合っており、庭園、戯台、閣樓、彫塑などが混在して引き立っている。青瓦も趣があり、青い石板の道は曲がりくねって伸び、訪れる人にまるで時空をさかのぼっているかの感覚を起こさせる。これは人びとにとって、往時をしのび、夢の世界を訪れるような素晴らしい場所であるだけでなく、深厚な歴史の基礎のうえに作り出された文化休息の雰囲気をもかもし出すものである。文物苑にくと、まるで歴史と対面しているかに感じられる。また、文物苑は明らかに地方文化祭の特徴をそなえている。特色豊かな広西元宵灯会、小吃節、端午節、中秋節などである。博物館がおこなっている各種の文物展示と融合し、地方文化の魅力を実に体験することができる。

我われは、文物苑の文化主体の概念の創造や、文化と観光の有機的な結合、博物館が

収蔵する資源の有効利用にともなう、広西の文化産業の発展にさらに大きな経済推進がともない、観光業にとっても大きな促進力となることを予測する。文物苑を、広西の豊かな歴史文化資源を産業発展へと向かわせる巨大な展示空間とプラットフォーム、地方文化開発をめぐる文化産業の鎖とみなすと、これがもたらす直接的、連鎖的な経済効果はかなりのものである。文物苑開発の重要点は、文化市場と観光市場である。そのうちの文化市場は、博物館の開発利用と結合して明らかな優位にたっている。文物苑は文化、休息、娯楽、賞味など多くの機能をあつめた広西で唯一の経済実体、総合の場となるだろう。

訳注：2008年12月に広西民族博物館が竣工したのを機に、銅鼓や民族文化に関する展示品は移管された。